

中村哲医師アーカイブ

*「インゲルハイマー」(二〇〇三年十一月号)より

ドクター・サーブとエンジニア・サーブ

中村哲

ツクツクボウシがしきりに鳴いている。夏ももう終わりだ。久しぶりに田舎のわが家で筆をとっていると、なんでもない自然のたたずまいが、巧まずして和やかな気持ちに蘇らせてくれる。人の世はあまりに騒々しい。偶には隠者の気分になって、無為に過ごすのも悪くはない。

今年の日本は豪雨、台風、地震とさんざんな目にあつて、その上猟奇的殺人事件が続き、あまり明るいニュースがなかった。海外でもイラク戦争やら、ヨーロッパの熱波やら、ニューヨークの停電やら、なんだか元氣の出ない話ばかりだ。

この御時世で「隠者気分」とは暗い話に聞こえるかも知れぬが、そうではない。雨

にぬれる緑深い木立を見ていると、やはり日本は恵まれた国だと、つくづく思わざるを得ない。アフガニスタンの早魃は相変わらず深刻で、少しは日本の雨を分けてあげたいくらいである。二千万人のアフガン人の九割が農民・遊牧民で、一昨年十月の報復爆撃の際、しきりに政治問題が取り沙汰されたが、難民の大半が沙漠化した故郷を逃れた農民だったことは意外に知られていない。

その上最近、政情不安がいよいよひどくなり、アフガニスタン全土で毎日数十人が銃撃戦や爆破事件で死亡しているのだという。首都カブールだけしか守れなかった外国軍は、米軍やNATO軍を増派して治安

維持に努めようとしている。「解放」されるはずのアフガニスタンも、報道を見る限り出口がない。米軍が去れば、あつという間に現政権が減びると、皆信じている。「国際的関心」も無責任なもので、半数の支援団体がイラクに移ったのだそうだ。これやそれやで、祖国に戻ったアフガンの難民は、Uターンして再び国外に舞い戻ってしまった。いったんは「復興支援」で帰還した一八〇万人の難民のうち、この一年で一五〇万人がペシャワールなどへ戻ったと言われる。

私ほど言えば、相も変わらず、現地で忙しい。と言っても、近頃はほとんど病院、医療関係の仕事に任せてしまい、井戸掘りや水路工事現場の監督などをやっている。沙漠化した農地を蘇らせ、村人が戻ってこないことには、診療どころではないからである。

以前は「ドクター・サーブ」と呼ばれていたが、新米の現地職員は、私が医者に見えないらしく、「エンジニア・サーブ」として声をかける。まさか医者が作業服姿でトラクターを運転しているとは思えないのだ。しかし、内心、「エンジニア・サーブ」の方が気に入っている。アフガニスタンの自然は、日本ほどこまやかさが代わりにならない。雄大で、高台から「こっちの河からあつちの丘の向こうまで」と、何キロも先の水路の位置を指し示して決定するのは、結構気分がいい。実際手がけている十六キロの

用水路掘削は、日本なら中小河川ともいうべきものだが、周辺の大規模な自然に圧倒されて、小川に思えてくる。

しかも、これで十数万人の難民が帰農して生きられると思えば、元氣も湧く。

もちろん、医療と同じく、やり方は近代的だと言いたい。数キロに及んで多数の農民たちがツルハシ・シャベルを振るって群がり働く様は、まるでピラミッド建設もかくありしかと思わせる古代的な一大絵巻だ。辺境ゆえにたいした重機も手に入らず、工事の主力は人海戦術とダイナマイト、資材も石と土が主で、コンクリート工事は極力避ける。護岸工事には大量の蛇籠を用い、

水路沿いは一万本以上の柳の植林で対処する。その丈夫な根っ子が水路の兩岸をしっかりと守ってくれるのだ。

これまでも小規模な灌漑用の井戸や地下水路を手がけたが、干し割れた大地が魔法のように緑化するのには驚く。その嬉しきはたとえようがない。だが実は「ドクター・サーブ」と「エンジニア・サーブ」は同一の感性でつながっている。仕事柄ハンセン病の再建外科を何度も行なったが、沙漠化した田畑の回復は、麻痺した手足が動き始める患者に似ている。理屈抜きに、いのちを得た喜びは同じなのだ。

ひと時なりとあわただしき世事を離れて

緑したたる自然に包まれ、虫や小鳥の声を聞きながら、水と自然の恵みと共に、「豊かなはずの日本」に思いを馳せるのも、また一興。ヒーリング（癒し）などと怪しげな流行語で飾ることはない。この和やかさはいのちに確かにつながっている。